里見八犬傳 拾五編 巻三十四上

へ13
709
83

門 迹 13
號 709
卷 83

明治二六年十月九日 購求

南總里見八犬傳第九輯巻之五十四

東都 曲亭主人編次

第百五十四回

貞行輿ゐ託て稚子を留む　毛野明ゑ察して死囚を免す

却説犬塚信乃。犬田小文吾ハ早天ゐ瀧田の城を出て。只管ゐ路をいそぐ。稲村の城の宿所ゐ入て来て。隨即毛野道節莊介現八ゐ瀧田ゆくあらゝ事の首尾を詳ゐ告知して。老館の御懇命。犬江ゑ遲参を果敢なきゆゑ。御意の趣い恁々ゑ。又那密義ハ音音曳ゑ章節ゐ別説ゐ。相鈦ぐくもんとゐゑ。單妙真い這軍役ゐ漏されて。恨ゝ且うち歎く。言果べくもあらざる。況ゐ亦忠義の誠心ゆく。雄魂の致ゐ所。叱ゐ禁るゐ由なけれバ只得其情願ゐ信して。一緒ゐ来ゐ該ゑ。その故ゐ那稚子ハ二尺八を。関く。況人あらぎる。是のゝ事の不便ゑ。犬阪宜く計ひ玉

へと迭代ふ其々。一五一十を解示ず。倶ふ聞く道節莊介現八も感嘆しつゝ音
音ハ素より勇婦。老たれども猶覚あるべし。曳ゐ単節ハ弱女ゆゑ。姉妹共ふ稚
子さへあるふ。命危く敵地の囚者。ゆゑんと勇むハ弱くゆゑ。是さへあるふ妙真の心操
も亦愛て。実ふ那老女の。執迷されとハ。親兵衛が面正くもあらぬ。犬阪今又
其徘徊するやと。齊しく問へば。毛野が申す。事の湊合ハ天の命。三個の婦女子ゆく
事足るべきを。又妙真の加ゆるも。亦是自然の勢ひ。恁る義姑節婦と。廣く江湖
上ふ求るとも。一人だに乏くかゝんふ。二婦ゆく猶餘りあるハ。則是両館の御盛德
実ふ當家の洪福。恁れば妙真を相加へて。期ふ莊まず共侶ふ那敵所へ遣さん。
不用意のゆゑれば。まづ館の御旨を請まゝ。暫く小事あるとゆく。先千
代丸ふ對面させて。後ふ稟上るとも。必や饒さゝるべん。犬川ハ咱もと倶ふ早く
堀内許ゆく。主の翁ふ仰を伺へて。豊俊を鞫問其。犬山と犬飼ハ妙真音音

曳ゐ単節が來ゆゑを俟て。両個の稚子。力二尺八寸。各其母親ふ携さゝて。推續
く背ゆゑ來ゆゑ。力二尺八寸のハ。堀内曳ふ告て憑まず。左も右もせるべし。犬塚
犬田ハ疲労て息へて。妙真媼の一條を館ふ告え上ゆゑ。日景短く時候なるふ。
卒ゆゑべしとのたまぶ。大家是を好と答て。莊介ハ毛野と倶ふ身裝して。伴當を
倶して堀内許赴けり。然ば堀内父子の宿所ハ固より當城内ふ在り。犬士等ハ
僑居所より。両三町ふ過ぎれば。毛野莊介ハ早く件の宿所ふ來て。名簿を執
接の若黨ふ渡して。對面を請ふ。貞約則閑室ふ迎入れて。對面あけり。登
時莊介が。曩ふ芳翰を。我毎七名ふ憑ませゆゑ。逆徒千代丸豊俊が
恁々の情願。恩赦を願ひまつると。一條を東荒川一毛ふ告て。同意の
上。隨即館ふ。先上げまつるふ。館の御内命ハ恁々。是ふよりて犬阪毛野が。敵を
刎ふ。ものゝ。秘策これまつる。ものゝ美ハ毛野ふ。ものゝ貞約頭を抬げて。唇

○東京大学蔵

紀造化ゐゐ之。咱ち去の夏致仕してより。いまゞ半年ゐ過ざるゐ。老病漸々ゐ身ゐ逼
ひて。約歩不便ゐゐゐ。養嗣貞住い君命ゐよりて。今い上總の椎津ゐ在り。既ゐ召さ
せられぬれど。今日狩明日還る。思べ。それども那千代丸の情願い他を待べ。時宜ゐれば。
已とを以ぞ各位を労ゐる。我ゐひゐ亟の言上面目あり。御意の趣謹く。義のひ
那豊俊の恩赦の願ゐ正ゐ他ゞ実情ゆく。只寛刑の仁恩を仰ぐの故ゐ。今
番の軍旅ゐ従ゐて。死をゆく報ひまゐうんと。庶幾ゐの。他事ゐ。一旦御敵ゐ
ひとり。那人さう。御仁政を感じまるとかくの如。況や咱ち。当家相恩譜第の
臣。不能ゐして年居ヨヌ顕職を汚ゐ。人として老ゐるゐ。朽惜ゐ者いひ。両
管領の大兵十萬江を渡るゐ風聲を。居ゐゐゐ。本意ゐさよとのゐ。毛野を
見久ゐ。噫。盍も。老の諄言憶ゐ無礼を仕り。却犬阪主の計畧い甚ゐ
る。彼を厭れゐ。守ゐ。ひうい。と。向れゐ。毛野い膝を找ゆく。翁い当家中興の老者

老人。秘策を。ゐく告ざうんや。晩生ゞ計る所者をいべ。箇様々々。尾い又箇様々々。
と。豊俊ゐ詭らせ。敵ゐ降参を請ゐ。其折豊俊ゞ敵の陣所へ遣を密使
ゐ。妙真立日立日曳ゐ。単節這老弱四個の婦女子をのくゐ。事初い音音曳ゐ
単節をのゐ。這軍役ゐ充ゐ。妙真ゞ漏されを恨を切る誠心ゐ已とを以ざう
ゐ意味と曳ゐ。単節ゞ児子力二郎尺八を初い姑且妙真ゐ憑を任用せ。他ゞ
宿所ゐ在せゐ。欲ゐ。妙真も亦役ゐ従べ。這心當の外れ。情由と他ゞゐ
ゐ。べゐ。べゐよりの其崖略を解ゐ。言果て又ゐう。却館の御内意い那豊俊の
情願の事。既ゐ公ゐの敵金定ゐ。詭誘ゐ。と思ゐ。十日十耳の視聴ゐ。
よくその情を探ゐ。若们藏人許ゐて。豊俊を鞫問して。言愈実ゐ。
毛野ゞ計畧ゐ用ゐ。とある。御上日ゐかくの如。ゐとして。件の義姑節婦ゐ。今日
豊俊を對面さゐ。異日の便宜ゐ。故ゐ那婦女子ゐ。道節と現八

が相伴ふく程ふく共宅へ来たれ。その義を禀演んとく我们両個先ずそ面談を請ひ給ふと告る詞の玉かハ淀君辨ふ貞幼い都てそのあるを認め謹て答ふ。御内意の言の趣兼ねい幼千代丸豊後を禁錮の義臣ぢ致仕退隠の後い

そ今仮貞住管りまるく。今ま第圏の外と饒さぞ那人館の御仁政を感服して。軍功をとそ那身の罪を償んと請明ふ言の虚実い臣ぢ屢試く。真実情ふるを知れり。遮莫料らく元い人の心を目今那身を牽出さぜん谷宜く鞫問ふ是。歳くく又一議あり。那妙真音日音曳ふ軍節ハ皆是忠義の本性ふく。或い其孫ふ代り或い其ハ良人其稚子ふ代りそ渡せ生死の海を怕ぞ俱ふ這回の軍役ふ用ひらるを相歓ふを。誰ふ感佩せざる。後世までの美談ふんを会れも見い公然ふる老婦人と容顔美麗ふ女弟兄ふ。然るを今詐獄鞫断の席ふく。俱ふ臂を連ねさるく未赦されざる罪人ふ対面さぜんい倒ふ面正くもるを

所ふるるぞや所詮件の婦女子ふ。その異日敵地へ赴くまで鰒生宿所ふ留置て豊後ふ対面致さまべ。又那両個の小児カ二尺八ふ。其母親の軍役果るまで鰒生是を管りく。荊妻拙女ふ養せん荊妻も拙女も稚児を愛る癖あり女児い近曽貞住ふ妻ーくれいらまぐ子ふ。ちゃとの他一人の子ふとも都く稚ふを見れば放ちるざる本性ふふへい他ふ必歓びて衛ちべ。あの義も心易うてんと意衷を具ふ説示せば毛野いちゃくん荘介も事の便宜を歓びて貞幼ふ謝ーてらるう。御配慮の言の趣其理ふ当つぢるい。那四個の義姑節婦を一旦瀧田の宿所へ返ーて異日敵地へ遣を折ふ又召ふ呼ふ不便るべ。然るを共宅ふ留められるば是を知ふ者稀ふーく且豊後の密使ふ敵地へ趣く身の出入ふ其所を汚さらとらべ。況カ二尺八を今政令愛ふ任用ーて其母親ぢ役果るまで共宅ふ措れんと一條い便宜の上の便宜ふく。特ふ安心住り貝とべ毛野も又云云と。其歡

びを演る折から。堀内の若黨が。檐檻に多く跪ゐて。貞行に告るやう。犬山主犬飼主が。鄙に來りて。次の間に在せり。又郎君い上總より。方僅還りゆくとの事を貞行うちうなづて。開を待執しらけんか。疾這方へといそぎ出て。忽く退く若黨の。案内にかりて。徐々と。這席に入る。両個の客い。是則別人。多くは犬山道節忠與と。犬飼現八信道。そは背に立つ。堀内雜兵太郎貞住。尚初壯衣の儘にして。躬く席末に坐を占れば。道節と現八。先貞行に向ひて。致仕の後も恙なきを祝して。又道節が。ふかう。却晩生者が。今日の所役い。婦人們の宰領。その所以い。鄙に妙真音音曳て。ひとよあやこ。多單節母子が。當城に來りければ。開が伊又轎子ふうち無せく。舁せて。其宅へ來ぬ。あらう。尚外視を數ふ。あれい。胡意背門より舁入れ。せーに。今政早く。少知るべし。俱しる婦人們と。稚兒母と。則奥へ迎させく。管待すること。少えー。折令。郎上總より。歸城あるーに對面して。俱に翁に。并に。絹次の間に。來ふけるに。翁い犬飼

犬川と。密談の最中なれば。詞の腰を折らじと思ひて。猶豫して。言の果るを俟ち。主客の問答。其大畧を聞くに。生見が。亦貞住も。親に向ひて。顔を。傾く。剛才。歸城のうを告て。且毛野莊介に向ひて。豫少知ぬ。けん。椎津の城主真里谷信昭主い。則館の通家。介るに那人年來。強飲の業なりけん。前月。暴に身故りーに。子息いるに。幼弱なく。有司と諸士と。確執の生えありしの故に。在下館の仰を。禀てのそぐ。上總に赴く。前月より。椎津の城内に在りて。件の確執を。解諭して。一家の和睦を執扱ひに事。なく平ぐ。老黨若黨。和順なる。力を勤せ。心を同くして。幼主に忠を盡さんと。則連署の歎言書を。呈覧して。黨錮の罪を謝して。在下猶且其の後を。敬言按く。罷歸。思ふ程に。大敵猛可に。水陸なる。推寄來べしと云。風聲あり。其虚実いまだ詳ならーに。両家老東荒川より。急遽脚の奉翰。とりて。早く還るべしと。下知せーまーべ。

随即椎津を立去りつゝ。いそぎて帰路に赴く程に。浦安牛助登桐山八小森但一郎田税力助も召れて父母其督る所の廳南榎本館山二箇城を。次役の頭人に譲り守らせて。連りに帰府をいそぎけり。料らず在下と路にて一緒になりからず馬を騈べかへるとぞ。尓より随即倶に大城に参上りて。疾と申上しかば早く見参を饒されて自他一様に舘にて拝見す。就中在下は猶且別室に召させたまひて。犬阪主の密策に依るべしと。いはば軍陣の御隊配と御口親詳に仰示させ給ひしかば実に面目身に余る欽びなるべけれども是に由て各位の連日の軍議配慮のよしを査しまつりぬ。今日は亦千代丸氏の一議まで偶蔽屋に光臨ありしに在下宿所に在らざりければ。まだ茶果の歎待にも及ざりけん失敬海容あれかしと陳る口誼に荘介は膝を找めて祝して。家宝に升る愛たきは椎津の家中の確執は亟に解れ畢るらんを。ヨヲく月を閲せずして事理られし和殿の

御手柄感心の外なしと応られば。毛野も亦貞住にうち向ひて。那拙策の趣は既に舘の御直談ありて。在るべきへ玉ひぬ。开も易かり且退けん長途の疲労を憩へたまはずやと勸れば貞住は唯々と応て亦復親にうち朝ひて椎津の一義も御前の首尾も目今告せ給ふが如し。况て犬阪主の秘策に用ひらるゝは身の面目欽せ免りと。いへば貞住點頭て。然なり。異日のおろ係べし。今はいそぐべき要事は這犬阪犬川の奉りて来まし。たれば生拘の逆徒千代丸豊俊を。鞠問の一義は汝は這御旨を鮠内兼西郎等に傳へ示して。豊俊を書院なる檐檻に牽居させよ。勿論汝は豊俊を常見に宜く衣裳を改めて其席末に列るべしとのる毎に貞住は応をして四犬士に辭して遽しく退りけり。姑且して堀内の若黨ゞが来て四犬士に茶を看め果子を薦めなどする程に又現八を郷哥に妙真旦目旦目ながら早く来にける折の便宜を毛野と荘介にいひあすく。郷哥に

和殿ども疾く歩み去り。一三百歩の遅速なく。他ども早く来れるを咱ども既ふの次の間なく。主公羽の計ひを受くことを得ざるーふそれより先ふ今春達ぶ件の婦幼六名を奥へ喚とりあひ。合さ一家児皆是一壮児なりけ。忠義を好情の外ふ他ならずと。誓言れば毛野と荘介も。主人の徳を稱賛ふ。歓び涯りなりけり。浩処ふ又一個の若黨ぶ檐檻ふ走り来て。額を衝て主人ふ朝ひく。千代丸氏を御糾明の准備宜くひと。生るを貞行ちゃ。ちんあり犬士達卒書院へと若黨を先ふ立て案内ふ来て。其身い徐ふ四犬士の後ふ跟ひ其席ふ造るふ毛野荘介い當役るれば端近く找そ書院の中央ふ居む。雑魚太郎貞住も既ふ公服ふ更ゆ。貞行と相對ひて毛野荘介の左右ふ在り。道節現八を検使。品ゆく。間六尺許退ゆく。雙て其上坐ふ居り。是より以下い前家老隷の青侍。艶内兼四郎い袴の下を股ぬ。祜り揚て腋

挿の刀を。墻短ふ跨く。檐檻の左の方ふ在り。その他い究竟の走卒五六名。或い豊俊ふ樹る要青縄の端を含り。或い笞杖捍棒を挾そ守りく檐檻の上と下ふ在り。登時四犬士い晴を定りく。倶ふ千代丸豊俊を見るふ。その人年齢ひ三十許。面の色白く。自晃梁徹りそ。骨逞く。坐身高り。月額の逆六七分延黒ぶれど。図圄ふ久ーに瘵瘦もく。然ども。憔悴るー。書院の檐檻ふ。席薦一枚布るふ。推登されて跪居り。堂ふ管児堀内親子ぶ。月屬惻隱ある所以るべ。そぶ中ふ。単荘介い。肚裏ふ思ふ。六稔已前我身武蔵の大塚ふ。簸上宮六ども。ふ誣られく。冤屈の罪ふ淪ひ。折丁田町進ぶ。奸虐る。水火の責ふ命危く。生ひ。ふりー身い恙ふく。賢君ふ仕まつて。今日い人の罪戻を諭断の職役ひ。那時我い郷士の小厮。今の豊俊い一城の主。良賤素是同ーひ。他ひ叛逆。我い忠義我其做を所。雲壤の差ふ左るい勿論れども。賢君上ふ在ず。悪

おとみ
けの
堀内の書院ハ智王忠義信と俱ふ豊後を鞫問ス

とうせろ
けの八
さぶらと
とんと

人も化して良善ふるの日あり酷吏法を枉れば忠臣も誣られて罪るゝ罪ふ死する
者あり寔ふ人の幸あると幸ふを儒ハ是を命といひ老莊是を自然といひ佛ハ
是を因果といふ以ある哉と懐舊の臆念ふ惆然たり當下貞任ハ豊後を喚
ていふ千代丸氏這個二位ハ當家の賢臣大阪毛野胤智犬川莊介義任又
上坐なる大山犬飼即是ゑ這四個の人々館の御諚ふよりて鬮問ふ爰あべし
具ふ答稟しねと先そのころを沈さまれば毛野ハそゞ儘端然と豊後ふうち向て千
代丸氏嚮ふ堂ふ管見堀内父子ふ就て請稟ふ情願の言の趣ふ差支池あら
ざるやと問れゝ豊後頭を抬げて然ッハ我性の愚ふ昏曩ふハ素ふ藤ゞ奸詐を悟
らず他と魚水の交りを做ふ遂ふ慮外の御敵と做るあらん墻壁隆車ふ
勝るるれば城陷り士卒離散して身ハ是楚囚の今まで仁君死刑を急ぐべ
き且堂ふ管見堀内吏の長者なる禁獄の守り忽諸るふも反て籠中の禽を

養ふふ只惻隱とのゝくせざるとゝ。是ふよりて餓ず凍ず坐して食ハ肘を枕ふて
睡るのゝ久あくるまで身ふ杖ず合の呵責あるべを知ざるハ則是君臣一致の仁心
ゆく。仰げば高ク德澤ふ羞ず報恩を思へども由なし願ふ所ハ這回の軍役ふ加へら
まゝ死とゝて罪を償ふ欲ずの外いなぞ亮察あれかと啣言がまゝ陳
ずるを毛野ハ少ゝ點頭て好そゝの美あらんと応て側を見るゝ犬川目
今少ゝ如し恩赦勿論なるべを狹と問ふ莊介応ハせず沈吟ずるを程ふ道
節ハ悚難ゝ佶と現八ふ目を注せゝ共伯ふ膝を找めゝ盃よ答ふ犬阪今其召
囚徒豊後の陳ずるハ堀内吏の愬ふ我少ゝ所と増減なし只然ざるを免
されば又拷問ふ及ぶまじ然ふ這ふ再四の問答もるゝ一言ふゝく信容まゝ
慮の一失狹犬飼什麼と見ゝれば現八然と領ずゝ和殿の小心愚も同意
言と心の表裏あるを亟ふ知るべくもあらぎ再三數四詰り問ゝ黄金白銀とゝを

文溪堂藏

るも錫欽鉛欽骨版い知れん犬阪疎忽ふあるぞやと詰れば毛野い合笑て其頭の小心極めてよ。我才子路ふあらざれば片言以訟を定むべい思ふども孟子の一書ふいるとあり。人の人ふめふ時言の虚実を知まく欲せば先其人の瞳子を見よ。瞳子偽々るるとえい偽々えと教えそう因て我今千代九氏と問答の折其瞳子を相く考るふ孟子の教果して違いぞたの人の願ひい実情ゆて虚言るるを知るふ足れり今更疑ふとうと解まく道節現八も其聰察ふ感佩して又論る由もるし。荘外えれをうちゆく。犬阪の鑒定宜ふ尓るい情ゆる者い其辭をよく畫そとを汐ぞ千代九氏の尓所始終符節を合する如く増減るえい是其情の一筋るあるし照験え犬阪い早く自得して相學さへ凡庸るねば今相る所逸早くその粥既ふかくの如し実ふ敬服々々と稱く同説の外るければ負約も負任も四犬迭ふ善ふ與まく已ふ勝ると忌ぞ嫌ぞ。俱ふ公ふて偏頗るえい當家の寶たの上あるド。

と感ドて憑しく思こけり。偽而毛野い堀内親子ふ召ふ各目今咤めひし如く千代九氏の陳る所。其実情ふ疑ひるし。館へたの美を稟上げるい罪免さるべえ者るれば權且縲絏を解鏡して。その処へ召升さん咱ゆる尚問ふべえるるこ示ぞべるあり。一要時士卒と退けめとふふ負任ちろふく。檻檻ふ侍る艶内兼四郎と。ちやと喚近つけく。事偽々と分有れい兼四郎い応をちろ。豊俊の賈縄をゆ早く解ふく坐席の方へ卒とぞろふ推找せく却走卒ゆと倶ふ外面へ退りけり。當下毛野い豊俊と身邊近く招よゆて聲を悄めく談まるゆう。千代九氏和殿館の御仁政を感謝して願ふゆ如く今番の戰ひふ従ゆとを饒されるい戰功ゆて其身の罪と償まく欲まる誠心宜ふ時を待ちとのべ。あれども弓笠刀剣い僅ふ一両個の敵を殪ものと乖ふぞよく大功を成さんや。和殿一箇の勇を負まで我計ふ従んとうべ。悄地ふ肺肝を示もべ。和殿の心いふぞやと問へ豊俊額

つ衛ぬ謝して。諸彦慈愛の執成によりて。喪ふべき我首を既に續れてのこさるゝも猶
後榮の頼をあるに縦水火の中へとも。いかでか推辭べき何事まれ兼ん願よハ早
く教示へと答る詞勇ましく。天に誓ひ地に誓ふ誠心氣色に見れしかバ道節荘
介現八ならびに貞行も貞住も現奨善の域に入りけるを。その人威を事あるべしと思へバ
頬厭面笑れバ。姑且して毛野ハ又聲を低めて豊後に示しまうす。千代丸氏我這方
すとのみ。大敵を鬩にせまく欲する。計略を諭ん然るべしと耳挟よせて耳に示
まくと半晌許。逆毛野が計る所。那八百八人を始めて。豊後に伴せて敵へ降
参の事の趣。其時豊後が。敵へ遣す密使の音音音と若弱四個の婦人を
用ふべきよしあれバ既に他等を召よせて只今奥に在るなれバ先豊後と面善見に
なさまく欲する前後の用心迭あらかじめさまれバ豊後歡び意外に出て忻然
として答る由。示教兼りひぬ今情願を容られて。軍旅に従ふのみならん然

る大役に克らざるハ面目なの上やハべきなの身ハ敵の士卒と倶に燬に播れ海に淪
むとも機に臨み變に應じて必做ん事なるべきや。なの義ハ心易かるべし。我身不肖に
ハへども。父祖相傳の遺領を兼て一郡一城の主なりし。恩顧の士卒なきにあらねど
然れども其忠義の志氣ありて且恥を知る者ハ。かの折戰歿して。餘子なき條
べし。その餘ハ城を二番に命を免れる。兵毎にいへバ徃方を索て召聚へて今番の
役に從まるとも事に益有るかからん耻しくいと陪話ると現八うち咲ぎて左まれ右も
あれ在処もなうね其残黨を索めて用ふべき時宜にあらぬ。和殿の敵地に赴く折
從まる從兵を犬阪が必準備あらんといへバ道節然りと應て更に荘介に向ひて
いふやう既に舘の御内意あれバ今日よりして千代丸氏の禁獄を鐃まともけしうあら
ぬ因なら。今故もなく囹圄より出さバ衆人必疑ふべしと云を荘介聞あへず其頭に
犬阪脱落あらんや犬阪什麼と請問へバ毛野ハ笑々默頭て賢兄達の小心。

我愚の所と相同し。堀内叟。貞住主。あの義をよくあろゐゆひ。又千代九氏を囹圄に返して。只守護を固くせぬ。近日赦免あるべけれがとく。由断の為体あく日を過さば。あの人囹圄を破り脱れ去りく。敵ふ降参もとらふ前後の進退吻合せん。敵と闘矢の日定らば。那地ふ造るふ又術あり。そもその折ふ談ぜべれ。先音音曳四個の婦人を千代九氏よ對面させく。異日の便宜ふ事整ひ。早く囹圄へ返さべ。とふふ堀内親子あろゐる。貞住みづから奥ふ曳く。妙真音音曳ふ單身郎を推辛て。ゐく来ふければ四犬士則這義姑節婦ふ豊俊を對面させ。密説既ふ果しらば貞紂と貞住い先四個の婦人们を早く奥へ退けて。却葉四郎们を喚呼へ又豊俊ふ腰縄被けく。牽せく囹圄へ返しけり。

作者少選。秃筆を閣く。且一服と煙を吹けく。漫ふ獨語て道く。本輯前前回ろ。ゐく至るまく。密説商量の段甚ヨヌろ。皆是後回の親保ふきばらばるとをゐざりけり。大凡其趣ゐく。看官ゐく歡ぶべ段。誰も綴く欲しべ。おゐ花もゐ平話を載く。丁寧反覆して。ゐく綴做せる。則作者の苦界とを然ば是ゐの苦界を省くば。善綴り果さん事い彼罪維貫李笠翁の大筆ゐも。必病る所ゐ。ゐく狹水滸傳を除くの外。吾其畫せるとヨヌく見ぜ。本傳い水滸傳ろヨヌ者五十回。水滸後傳を加えても。尚十回餘りあり。俗ふ云下るの長談義ゐべ。蓋小道といへども。必見るべ者あり。君子い泥んとを怕ろ。烏滸技ふ。烏滸の用心あり。看官作者の苦界を知ぜ。辛たも苦ゐも雑へくて。五味塩梅ゐ意味いれ。是烏滸人の用心ゐぜや。

第百五十七回

上總の民孝義我再恩を亨く
安房侯仁心軍令を定む

ゐの日犬阪毛野犬川荘介犬山道節犬飼現八ゐ。堀内親子の宿所ぜ。

千代丸豊俊と密議果てゝ。僑居所ゆかりあり。隨便犬塚信乃と犬田小文吾ゆ件の事の趣を送もゆく告知るゆ信乃小文吾ハ力二尺八の事の便宜を欽びく。這里ゆも館ゆ妙真の事ハ情由を詳ゆゆえ上げゝゆ館の御感浅くゝ。その後とも。事毎ゆ我旨を請ふい要るゝ。毛野ゆと共ゆ先相計こて。後ゆ告よと宜ひゐ豊俊のゆも尓るゝんと告るを毛野いちゆく。遮莫密議も亦君命ゆ依るゆゆゆ。疾稟上ん。そ荘介と共侶ゆ。凜ゝく君所へまゐりて。則義成主ゆ貞約の計ひ豊俊の羊服通くゆの日の事の便宜を。悄地ゆゆえ上あらべ。義成感心大々ゆゆゆ。豊俊のゆの上も毛野が方すゆ任るとく。其挿記を賞せらゆ。左右ゆる程ゆ十一月い盡僅ゆるゝ時候。豫武藏ゆ在りける里見の間諜児ゆゆ。夜毎ゆ快船ゆ。乘ゝ走ゝゝつかへゝ来て。敵地の動静を注進ゆ。然ゝ扇谷定正の五十子の城ゆ。加勢の諸侯漸々ゆ着到ゆゆえあり。

其隊々々の大将ハ。山内顕定父子を首ゆく。滸我の成氏石濱の千葉自胤白井の長尾景春越後の龍の大刀自及両管領扇谷山内麾下の諸城主大石憲重其子憲儀白石重勝。小幡東良ゆこど。枚挙るゆ遑あらゆ。ゆの他ゆ。武藏相模の野武士毎ゆ招ざるゆ聚ひ来て。両管領の隊ゆ屬く者辟言ゆ群る蝗の如。ゆの内中。山内顕定父子い。本月晦ゆ勢汰あゝん。十二月朔ゆ鎌倉を出陣して。二日三日の比五十子の城ゆ入るべゝと。ゆ風聲あり。又相模の三浦義同甲斐の武田信昌い北條長氏の壓ゝ。惑い子息惑い親族を大将ゆて。加勢あるべゝと定めゝるゆゆゆ。義同の嫡男。三浦暴二郎い獷勇ゆゝて。膂力百鈞を挙るゆ足れり。然れども頃日寒熱の恙あり。病臥ゆゝていまゞ出来ゆゆ。又武田信昌い親族の中誰を軍代ゆゆて。詳ゆらゆ。單内管領持資入道道灌い年来扇谷殿の乱政を諫難く。糟谷の館ゆ屏居あられば。

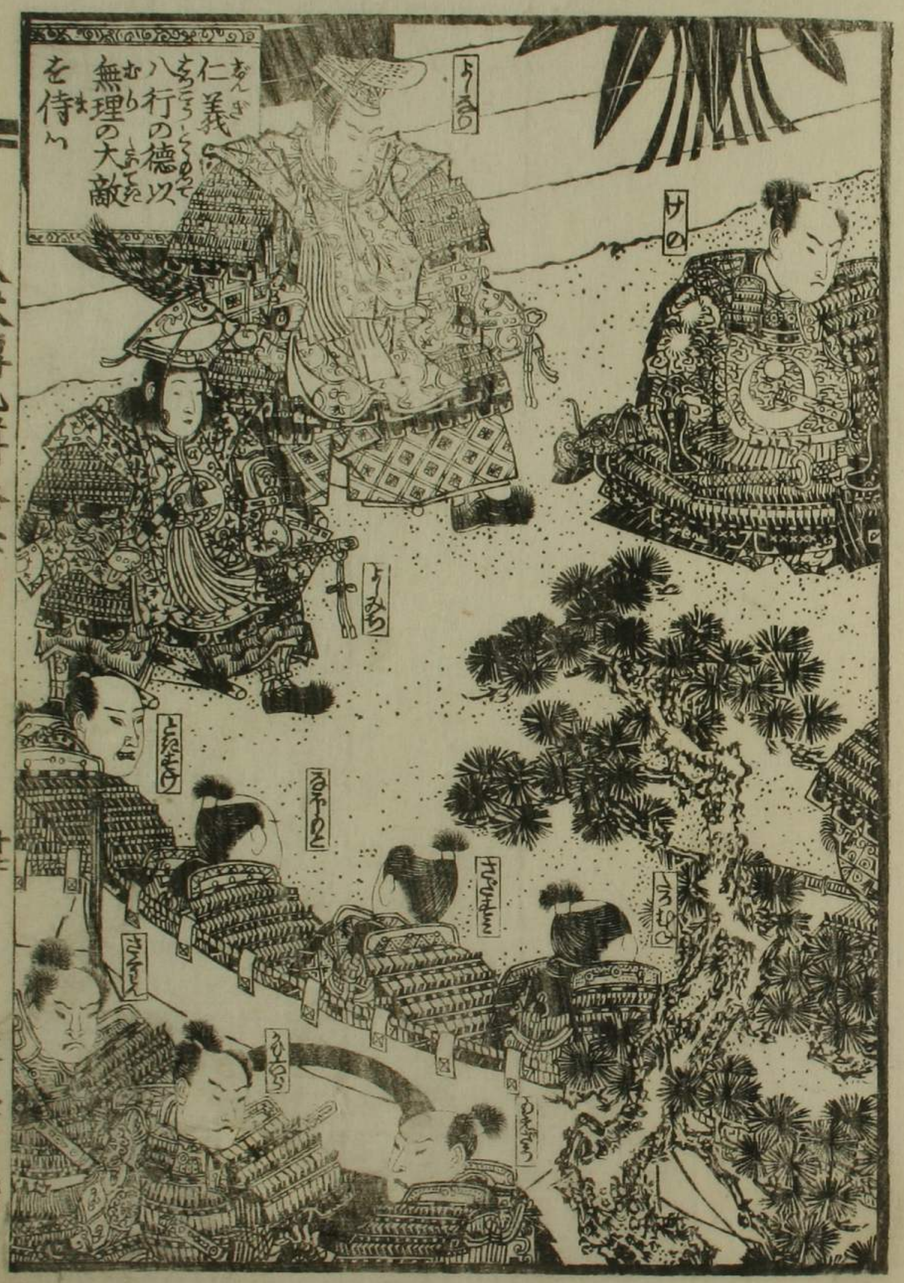
今番の役ハ従ゑ。子息薪六郎助友をもく。其催促ハ元ん。と。助友もいまざいで来ず。是等の遅凝不参の諸将を除くとも。其勢既ハ十萬餘騎陸い下總の行德國府臺水路い徑ハ洲崎へ渡りて安房上總を略ると云そ。言今日ハ昨日より細しくて疑ふべくもあらざれども。義成主い。隊より思ひ給へ。敢噪ぐ氣色なし。折ふし安房上總下總ふ自家の軍兵漸々ハ稲村の城へ着到ふる者二萬五六千ハ做りしぶ。ハも士卒の隊配しく。水陸の備を立んとく。十一月二十八日ハ當國洲崎明神の社頭ゑ本陣として。士卒を送るく聚合ら。總大將里見安房守兼上總介源義成朝臣。薄金の鎧錦繡の戰袍ハ精好の奴袴を張せく。大月形の大刀ハ皐皮の尻鞘被けるを佩做して。ハ純金の麈を採く。登児ハ尻を掛け。慢幕の下金屏建しく。本陣の中央ハ。次ハ婿男。里見御曹司義通小櫻紙の鎧戰袍ハ精好の奴袴。猩

猩緋の草沓穿て。牽狙の名刀ハ。豹皮の尻鞘ある。を佩做しる。尚童年の副將ゑれども。威風宛父祖ハ似く。登児ハ尻を掛る。相貌猛々しくして。愛敬ある。最美しくゑそろける。這両大將の左右両側ハ華裲布せく。軍師犬阪毛野金碗宿祢胤智。水陸の防御使犬塚信乃金碗宿祢成孝。犬山道節金碗宿祢忠與。犬川荘介金碗宿祢義任。犬田小文吾金碗宿祢悌順。犬飼現八金碗宿祢信道。鎧の紐糸。八彩ゑ。ん。を。茲ハ五色と間色ある。の。戰袍以下の武具ハ各々その色を分てども。心ハ同し。忠義の壯雄信乃ハ村雨の大刀。桐一文字の匕首。荘介ハ雪條の両刀を帯る。然ハ毛野道節現八小文吾も。或ハ家伝。或ハ感得の名刀を帯ざる者なく。札ら。身冑。晃星の頭鎧。臂縛脛衣ハ至るまぐ。あの日を晴と打扮る。武勇胆畧一様ゑを。具ハ名狀ゑべくも。皆一列ハ侍坐ゑる。其左の一側ハ當職の冢

宰。東六郎辰相荒川兵庫助清澄兵頭杉倉武者助直元堀内雑魚太郎貞任上總の舘山の城の頭人小森但一郎高宗田税力助逸友上總の廳南櫃本西城の頭人浦安牛助友勝登桐山八郎良千等。武具孰も見光やうゆゑ。斉くゆゑ星列うの他致仕の老黨杉倉木曽介氏元堀内藏人貞紀。小森衛門篤宗浦安兵馬兼勝等ハ衰老出仕ゆ堪ざれども。當家の安危ゆの時るうんゆ坐して食ひ温ゆ衣く。屏居く身の幸えと思ひ人の道るうんや。縱杖ゆ推りても御陣ゆ從ひまううんとく。各再勤の願書をるく。齊一請禀あーかも。義成是を許しゆゑ。其父老く。其子易るハ則天の下の通義ゆ老ゆハ既ゆ功成りて。身退ゆるゆゆゑ。故ゆ今直元貞任友勝高宗逸友ゆ或ハ父ゆ嗣ゆ或ハ小父ゆ代りく我ゆ仕へく。皆精勤の等えあり。然るを老ゆをさへ軍陣ゆ駈入れゆ。當家ゆの人ゆ

やとう。他郷の人ゆ笑れん。ゆの義決して無用えとなりゆく。今ゆ老ゆを願ひ稱ゆ返を尉ゆるうるゆゆ。各安然と屏居く日を過ゆを慨しく思ひるゆ。瀧田へ參りく。老舘の御陪堂ゆ做りく尉ゆまううね。然ゆを欲ひゆべれ。瀧田といへども敵を待ゆ龍城ゆゆうるゆ。枉くゆの義ゆ從ひね。と叮寧ゆ諭さゆを。隨即瀧田の老侯ゆゆの趣を告ゆゆ義実主欲び感じて。件の四個の老毎を召ゆて連りるりければ。氏元貞紀。篤宗兼勝等ハ各ゆの懇命を義りく。俱ゆ感涙の拭むを覚む。現賢君の御計ひ孝ゆく且慈悲ゆ。從ひまううばくむやとく。俱ゆ瀧田ゆ赴ゆく。權且ゆ龍城ゆゆうるゆ。ゆゆ是昨日のゆるゆゆ。今又一個の老実児ゆ是則別人るうむ。是義ゆ上甘利墨之助弘世の為ゆ主僕安身の莊園を與へられゆ。天津九三四郎員明也。と精悍ゆ武具して。其莊園の莊客二十名許ゆ鮫甲を擐せく率

き來る。則東荒川両家老ふ就く。請稟まをす。大敵封域ふ荒ぶるとふ其ゆえある故ふ。今日のうちく敵を逆ふる。御隊配を定めゆふとるん。人偽ふゆ知アらく。いろぐ萬一の報恩ふ仕へまつらん為ふのこ。推参仕りゆる。主ゆくい墨之助弘世い両館の御仁慈ゆく。絶る家を嗣ぐ廢る祀を興ぐことを沼てゆへ。なりかさる。あの故ふ臣等弘世の名代ども那身臣弱ヨ病ゆく。軍旅ふ従ひ難ふ由縁あ沼犬と〜て。死をめく洪恩ふ報ひまつらまく欲ゆ願ふい神餘金碗ふ由縁あ沼犬士の隊ふ屬させめくとふ。情願老実也ければ義成則九三四郎を召近つけく。みづから諭しゆふ。汝の情願所以る沼ふあるねど人各其主の為ゆ。汝い他を見のへらぐ墨之助ふよく仕へく。らく那身を終ら志ふをのく職分ふ做ゆへ沼者ゑ然れゆ今。這軍役ふ従ふゆ。我ふ仕る八犬士等既ふ赦許を蒙りく。皆金碗宿祢ゑれい墨之助ふ代るゑ足まり。夫孝子ゆ其親の為ふ山厳墻の下ふ立ゆ。忠臣い其君の與ふ。御黨の戰を助けゆ。汝の志い賞ゆべし。其願ひい許しつさる。速ふ退るべし。と言叮寧ふ制めゆ。九三四郎い感涙の拭むを覚ゆ額を衝く。尊命ふ悖りならば罪免まらくいへとも。死より重沼い仁義ゑ命い人皆惜めども。身を殺しく仁をるゆ者あり。死を怕れゆ義ふ仗る者あり。是其死より重沼所。已とを沼ざるる。弘世倘人並ふ。今の軍役ふ従ざらんや。従ふく戰死ゆとも義の為るゆ悔るふ沼。いろぐく。と諄返ゆ。言已べくもあらざれい義成主憐く。ゑらんゆい是非ふ及ばゆ。宜沼役を課せんゆ。汝い權且稲村の城ふ在りく。兵粮運送の事を助け勤むべし。能剛敵と戰ふく。堅土を破り鋭を辟かくゆ善兵粮を運送して自家の士卒の命を係ぐゆ。其忠其義ふ異るとる。昔者唐山漢楚の戰ふ。蕭荷曹参る。始終蜀ふ在りくよく兵粮を運送ゑれい。漢の高祖


仁義
八行の德以
無理の大敵
を侍い

七十五戰の功成て四百餘年の大業を開たれ汝が義を思ひ出と諭し
給へば九三四郎も感涙を流し恩を拜して退く。倶に立る莊
客等共伯父の命に従て稲村の城に竜りけり。其の時又那南弥六が弟子上總の
普善村の莊客阿弥七又椿村の隼八も倶に軍役に従ふて在
りと聞えしが義成則荒川清澄に命じて那阿弥七は其兄南弥六が
義死の賞として既に諸役を免して居る者と且阿弥七が二男増松は南弥六
が養嗣なるを聞て我召使んと思へども年尚十一なりとて其義に及
ざり紀又椿村の隼八も其母親に孝ある者と聞て曩に南弥六九
三四郎出來介復五郎等と倶に安房に住ることを欲りせず其任侠の義を
孝の為に思ひ絶て請ふて上總へ還りしに其の軍役に駈使て他に孝心を
奪ふに似たりと其の義を聞て他等に示して上總へ返すべしと下知ありしを

清澄則阿弥七と隼八を召て館の御仁命箇様々々と件の下知を
伝へ渡して身の暇を取れば阿弥七等は感謝に堪ず則答禮をなす。
御諚有て紀又椿村に赴く。恭く義りに及へども。初舎兄南弥六が重罪を饒させ玉
ひし御恩澤の大なるを以て他が身後にも大江殿及光老の御執成を死栄の
花に比し縦催促せられずとも今番の軍役に漏れず後々までも人
通る恩も義も辨知らぬ烏滸の白癡とていらん其の故に御役に立べき者に
は少とも増松を携て御陣に参りに御諚の重けれども阿容々々
と辱て退らば必南弥六が霊馬に酷く出りに願ふに隨使せぬ
と意趣を盡て涙と共に打て帰る其子増松を喚出して清澄に見
せ給へ去て欲せず又隼八も其心操を陳て願に禀せず。御諚に阿
弥陀の慈悲本願に異ならず義に及へども初謬て老館を犯しまつる

欲しける。悖逆の罪免れくれを。饒されく舊里多。椿村ゑ還り〜日毋ゑ恁
恁と告〜ゐ毋親ゆ〜うち泣く其御慈恩を努る忘れそ。身を終るまで
勉哢〜く。年貢諸役ゆ人一倍ゑ身を入まく仕へまつれと切ゑ教ゆ。然
今番の軍役ゑ狹ぢく。まゐ〜ハ則親の心ゑ然るを御免を乞うとそ退
らゐ毋ゆ〜ゆ〜く。腹を立いんいくぐ當役を果さをゆ然らでハ親の
心易かゐべくゐ。いらでくとだるゑ。額衝伏て立ゆ去るゆ甲乙共ゑ誠心の
大々ゐる敵を強難ゐ清澄ハ退ぐく。義成主ゑ阿弥七隆忠ゆ陳情の
言の趣を具ゑ申え上げ〜ゐ。義成主感心浅ゐゆ現匹夫ゆ。志を奪ゑ
べゐゐぞ然べとく。他們を勇士の隊ゑ在〜せゐゐ。倘不幸ゑ〜て流箭前翦丸ゑ
命を殞ゆ。ことゆあゐん狹是ゆ亦不便ゐ。ゑの故ゑ今他ゆ二五名と〜く烽
火臺の助役ゑ。但〜増松ハ童年ゐれども洲崎木工ゑ外孫荒磯

南弥六ゆ後〜ゐをのて氏を磯崎と名生ゆ〜せく。宜く助役の頭人とゐゆ
べ〜因く阿弥七と隆忠ゆ。倶ゑ増松の後見〜て。當津の烽火を。掌ゐゐ。
職分ゑ。ゆ〜ゆ〜ゆよ勿論烽火ゑ本役の士卒ゑ。其兵毎ゑ上日を偽へく。
新舊一致〜ゐべ〜と。重て下知ゑ〜ゐ。清澄奉ゐ罷出て。隨即増松阿
弥七隆忠ゆ。御諚恁々とゐい渡〜ゐ且烽火臺の士卒ゑ下知を偽へて。件の
三名を遣〜けれゆ阿弥七増松隆忠ゆ。ゑの毛を漸々ゑ偽へ
ゆく。二萬五六千の諸軍兵誰ゐ感悦せぎるべ。仁君上ゑ在まれゆ。畏圃の中
ゆも忠信ゑ。天の時ハ地の理ゑ不如地の理ハ人の和ゑ。ゑ〜ゆ〜ゆ管領烏合十萬の
衆をゆく。襲ひ伐まく欲まるとも臣民一和の我君ゑ豈勝ことを得べけんや。と思
ざる者ゐるゐけゐ。間話休題。ゑの日又義成主ハ兩家老辰相清澄並ゑ軍
師犬坂毛野。防禦使犬塚信乃。犬山道節。犬川莊介。犬田小文吾。犬飼現

八犬士に告示あるべし。我堂外國の制度を思ふに約束の得失は總大將なる者に係らぬことなし。其君總大將を擇び任ずる時、必ずこれ節刀を授けて賞罰を儘ねること漢の高祖が韓信を擧用ひける時の如し。即是この玉弓あり。あの故に其從軍の偏將なる者、諂ひ敵の爲に敗らるゝことある時は、總大將の罪として解官せられざるべし。我皇朝も神代より早く這御制度あり。書紀に文を照して知るべし。然ば國賊征討の總大將あ必節刀驛鈴を賜ふべし。賞罰を任じ給ふ。蓋其中葉は忠文朝臣の將軍を討ける時なり。近世義貞朝臣の尊氏直義を討ける時まで朝憲正かりしの如し。あるに世の降りて、昨今は全く舊例廢れて然る制度なし。只其一隊の將なる者諂ひ敵に敗られて士卒を喪ふことあるも總大將の罪とせず。あの故に軍令明らかに賞罰正しくぶれば血氣ある者動もすれば先駈

まで軍法をたつべし。さて力戰を上日として謀畧を好む稀人丈事に臨て怕れ謀を好む成る者は唐山聖人の用意なり。豈力戰をのみ勇ありとせんや。あるをのみ。今我制度は隣國の軍法と同じからず。水戰は我總大將なり。又陸戰は義通をのみ。總大將は元れども水陸共に進退は軍師防御示使なり。犬士等の指揮に從ふべし。犬士等倘失あらば必先我を罪せよ。犬士等皆軍功あらば士卒も倶に賞祿を取せん。我は素より人を殺すことを嗜まず。況や那両管領に怨なし。今るを定正非理の恨を名とする欲敢て我を征せんや。我已にこれを知れば備を做すべし。約束闘戰の間其當の敵に逼りて殺すべし。殺さるゝを好とせん。只敵の大將を生拘るをのみ大功とす。首を捕るを大功とせず。犯す者は法に処せん。我衆に示すの軍令を早く下知せべし。則毛野信乃道節荘介小文吾現八に名刀各一口を賜

ふく。且命もつく。各士卒の軍法に違ふ罪ある時は先斬く後に生ふよ。親兵衛と大角も。倶に這大刀一口を賜ふべ。他もを今。當陣に在ざるに。親兵衛に賜ふを信乃に。大角に賜ふを。現八に渡し措ん汝も權且これを藏めて。異日他もに授へよかし。他もは這里に在らぞとて。我も用に思ざる誠心をのく。恁いふ宜くたの意を查しねと言深切に示しぬべ。六大士もに拜し受て恩命微軀に餘りあり。倶に犬馬の力を盡しく。仕まつらんとぞ言示しける。然ぞ辰相も清澄も及直元貞住も。高宗逸友良千友勝是より以下の每もたの命令を兼る者。皆共侶に感佩して。畏りをぞ稟しける。偖も折から龍田丸。東金朋三小湊目鱆船貝六郎もは義実主の使を兼り。主僕倶に武貝て。既に當田陣に來ふけるよ。今命令の最中なれば。其從兵を退けく。權且幕の陰に居り。言の果るを待ちける。